
クレストブラット+(プラス)

サイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレストブラット+（プラス）

【Nコード】

N1219B

【作者名】

サイ

【あらすじ】

視力の無い主人公である少年、カイト。彼が自分の眼で光を見るのはいつであろうか。そして光の先にある世界とは？

序章

・・・闇・・・

彼の世界は、常に闇の中にあつた。彼、カイト・グレイスターが生まれ付き持ち合わせていなかった”視力”の代償は余りにも大きかつた。故に彼の世界は闇に束縛されたままにある。幸い、機能していないのは視力だけであり、他の機能に以上はなかつた。しかし、視力を伴わないそれらは一体如何なるものなのか。

何が発したか解らぬ音、何を口にしたか解らぬ味、何が漂わせているか解らぬ匂い、何に触れられたか解らぬ温もり・・・。

だが、自らの世界を闇に侵されても、彼は命を断とうとは思わなかつた。彼の世界は未だ始まつてはいない。幕を開けてもいないステージに、幕を降ろす事など出来るのであろうか？

否、彼はステージにすら立つていない。

彼を取り巻く物語も、彼を支える出演者も何一つとして無い。

だが、未だ定まらぬ開演時刻を待ち侘び、一早く席に着いたものがあつた。

それは全の世界。一の世界を見る全の世界。

全の世界は一の世界を創り、一の世界は全の世界を創る。全無くて一は無く、一無くて全は無い。彼の世界を取り込んでいない全の世界は、未だ未完の状態にある。彼の世界が始まり、彼の世界が終わりを告げるまで全の世界は完成しない。総ては幕が開けてから、総ては彼が己が眼で自分の世界を観てからである。

「さあ、観せてくれ・・・。君の世界をッ！」

一の世界の開演を待ち焦がれた全の世界が、何処か叫んだ・・・。

Act 1 Scene 1

…世界を覆っていた闇が、少しずつ光に侵され始めた。

長い夜の闇は、新しい日を告げる光の前に為す術もなく掻き消されてしまった。

日は昇り、朝日を背に連なる雄大な山々が幻想的な村、クレームス国の東部に位置するこの村は、人の出入りが少なく、立ち並ぶ家屋も何処か寂しげな雰囲気漂っていた。

もつとも、この村はかなりの過疎地域となっていた。

理由として挙げられる事は、中央部の都市に出稼ぎに行く者達の増加である。

この村では金になる仕事が殆ど無く、生活していくにはかなりの無理があった。

家族を連れて仕事を求め中央部に引越す者や、ただ単に何も無いこの村に嫌気がさして出払った若者も少なくはない。

大抵はそのまま中央部に落ち着き、そこで一生を終える者達が殆どである。

そうしてこの村の人口は年々減少していった。

この時代においては決して珍しい事ではなかった。

現に過疎化の波に耐え切れず、その土地を放棄した集落もある。

しかし、この村の壊滅を防いでいる物があつた。

それは、山の禁に建てられた教会である。

この教会はとても古く、外壁には所々に亀裂が生じていた。

それ以外の壁には無造作に成長した植物が、教会を飲み込むかの様に生い茂っていた。

これらの植物は花を咲かせる種類では無く、ただ身近にある物に絡み付き、養分を搾取するものであつた。

この教会は孤児院として機能しており、神父が身寄りの無い子供を引き取って暮らしていた。

暮らしぶりは決して裕福とは言えず、基本的には”自分の事は自分でする”といった生活がとられていた。

それでも雨を凌げる屋根が有り、決まった時間に食事が取れると言う事でここに来た子供達は皆満足していた。

この孤児院にいる子供の数は七人いて、年齢の幅は広く、二歳に満たない子供から、十二歳ぐらいまでの幅があった。

もともと、生まれて直ぐに捨てられた子供もいる為、性格な年齢が解らないのが殆どである。

昼過ぎになり、子供達が外に出て遊んでいた。

静かな山岳地帯に飡するのは子供達の元気な声だけだった。

この光景を見てこの子供達が皆、親から捨てられたなどとは思ってもしないであろう。

それぞれが辛い過去をその小さな肩に背負いながらも元気に振る舞う子供達を遠くから眺めている人がいた。

その人は教会の部屋のベットにいた。

この施設にいる事から、孤児として引き取られた事となるが、それは周りの子供達と比べ、外見からして年上であると解る。

彼は窓の外で遊んでいる子供達を見ていた。

しかし、彼の目には何も映ってはいなかった。

彼の目は光を失っているのだった。

ただ声のする方向へ身体を向けた結果、あたかも外を見ている様に見えるだけであった。

孤児院でカイトと名付けられたこの少年は、ここに来た時点で既に視力を失っており、おまけに記憶さえ無かった。

それでも寝床と食事を与えてくれた事には感謝しつつ、何もできない無駄な時間を満喫していた。この個室にずっといる彼にとってする事は無く、眠るか様々な音に耳を傾けるぐらいであった。

(……もう少しぐらい…眠るか…)

常に暗闇の中にいる彼にとって夜という時間が解らない為、眠くなったら眠ると言う生活を送っていた。

昼夜に眠りに就いた彼が再び目を覚ましたのは、十時間後の深夜であつた。

Act 1 Scene 2

…きいいん…

「つア…ツ！」

彼の眠りを覚ましたのは、唐突に現れた頭の中を掻き回される激しい頭痛だった。

…きいいん…

「うあ…あ…ア…ツ！」

音を引き連れた頭痛は、収まることなく脳髄を掻き回した。正確には『頭痛を引き連れた音』で、彼には音を認識する前に頭痛を感じていたのである。

…きいいいん…

「うああ…ああ…ア…ツ！」

音は、止むことも弱まることもせず意識を掻き乱した。ぐちゃぐちゃに融かされそうになる意識を必死に掻き集めるが、それは無駄な行為で、意識は霧散していく一方だった。

…キイイイイイイン…

「アああ…あ…ア…ウ…ツ！」

そして、一際強い頭痛は彼の意識を完全に融かした。どろどろに融解していく意識の果てに、彼は不思議な光景を観た。

そこには暗闇の中、月の光に照らされて辛うじて形を認識できる建造物があった。それを囲むのは、まるでことその向こうの世界と遮断するようにそびえ立つ山…。そしてその山の一つの頂上にいる誰か…。その風貌は異様としか言いようが無かった。

深く被ったフード、そして風に靡くマントの間にちらつく得体の知れない物質により形成された長い棒。その誰かは、山の中央にある平けた丘を見ていた。そこには教会があるハズだが、その誰かはソレを認識できずにいた。ただ何かを待つように、その場を動かうとはしなかった。

と、その時、待ち望んだ何かが訪れた。それは、昆虫の様なフォルムをしているが、全体に機械的な部分が目立ち、その後部には長い白髪のような細い糸が数本伸びていた。

「お疲れさま、アポロン」

そう呼びかけ、アポロンと呼ばれたモノを、差し出した右手の掌に乗せた。すると一瞬にして光の粒子になり、掌に吸い込まれるように消えてしまった。掌には夜の闇の中に、輝く紋章が浮かび上がり、その淡い光に照らされフードの中が露わになった。それに答えるように、強風がフードを取り払った。

そこに有るのは、風に靡く艶やかな金色の長髪。丘を見据える瞳は蒼。そしてバランスの取れた綺麗な顔立ちから、それが女性であることが解った。

「“不可視”（ステルス）、“不可視”、“不可視”、“不可視”

…。ハア…。単純な術だけどここまで自然的要因が重なると本当にややこしいわね……」

最初は何かから読み取ったように、後はそれに対する感想、と言うより愚痴を呟き、

「このままだとお手上げかなあ……」

と、そのまま拗ねた子供の様に頬を膨らまし、座り込んでしまった。その姿は外見から見て取れる印象とはかなりかけ離れていた。視線の先に有るハズの教会を目指す彼女の目的は謎のままであった。

Act 1 Scene 3

霧散していた意識が徐々に集い、自分という存在を確立していく。最初を感じ取ったのは夜の空気の冷たさ。次に、夜の静けさ。これらの条件立てから、彼はここが自分の部屋で、あの頭痛で気絶してからあまり時間がたっていないだろうと考えた。しかし、その考えはすぐに否定された。なぜなら、今自分がいる場所に、自分の部屋としてきた場所に…

- 光など無かった -

何も無く、触れた物だけを認識し、空白の時間を過ごしてきた。何もない事から、闇に閉ざされているからこそ、そこが自分の居場所と捉えていた。だが今は違った。そこに在るのは月明かりに照らされた、殺風景な空間だった。白い壁、自分の寢床としてあるベット、夜明けともなれば日差しの射し込むであろう窓。いきなり『闇の中』という世界から引きずり出され、狭いながらも初めて知った『自分の部屋』。そして、その世界とちつぽけなガラスを隔てて広がる『本当の世界』。それは、彼にとって衝撃的なことであつた。脳になだれ込んでくる莫大な情報を理解しようとするだけで、脳内の神経が残らず焼き切れそうになる。

「…生き、てる…」

それでも、こんな言葉が出たのは初めて自分という存在を認識したからであろう。

自分の思い通りに動く四肢を見るだけで、生きているという実感が湧いた。そして自分の周りにあるモノを認識できたおかげで、空白だった心が急速に満たされていった。それは恐怖心でもなく疑問でもなく、純粋な好奇心だった。人間としての純粋な欲求の衝動に駆られたカイトは、すぐにベッドから跳ね起きた。そして、自分の部屋と外の世界を区切るドアに手を掛け、小さな世界から跳びだした。

夜の外は、無情にもただ風が吹くばかりだった。谷間から吹き抜ける風は、微かながら^{エーテル}靈子を纏っていた。そして、その風を今なお浴び続ける人がいた。金色の長髪を風の流れに委ねて、ただそこに佇んでいた。何も無い場所を見据える双眸は、全てを見通してしまうかの様だった。射抜くように、見えない『何か』を必死に見ようとしていた。瞬間、微かな『形』を認識した。それは、先程まで見据えていた場所に現れた。

目標を認識すると、彼女は、静かに夜の空を駆けていった。

広がった世界は、明るい闇に覆われていた。夜の暗闇を照らすのは、窓から差し込む月の光だけであつた。だがその光が、彼にとって喜ばしいことだった。今は、暗いと思える事が何より嬉しかった。以前までの何もない世界とは違い、『暗い』という世界の色を認識できる。自分のすぐ右にある窓から見える月が、薄明かりながらも自分の世界を照らしていた。左に見えたのは薄暗い廊下だった。廊下の奥に見えた向かい合った二つの扉が、他の部屋が有ることを表し

ていた。その手前で十字に交差した廊下によって、更なる広がりを感じた。交差した廊下の右側には、上階へと続く階段があった。そして、一歩踏み出したその時

カッ

木製の床を打ち鳴らす甲高い音が響き渡った

カッ

確実に近づいてくる足音

カッ

―それは―

カッン

- 彼を -

カッ、ン

目の前に現れた金色の長髪の女性は、

「こんにちは」

深い慈愛の笑みを浮かべて、

「さようなら」

そう告げた

- 殺しに来た、天使だった -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1219b/>

クレストブラット+ (プラス)

2011年1月19日06時44分発行